



論説委員室から

マクナマラ氏の教訓

ベトナム戦争当時の米国防長官マクナマラ氏へのインタビューを中心にしたドキュメンタリー映画「フォッグ・オブ・ウォー」を見た。

核戦争をギリギリで回避したキューバ危機の攻防の裏話なども興味深かったが、何より印象的だったのが、ベトナム戦争も含め、誤りを率直に語るその姿勢だった。東京空襲についても、一晩で10万人の市民を殺したことを「戦争に負けていたら戦犯だった」と振り返る。

90年近い人生で得た教訓のひとつが「人は善をなさんとして悪をなす」。イラク戦争で「善をなした」と信じるブッシュ政権の人たちに聞かせたい言葉である。

もう一つ感じたのが、「記録」の重みだ。マクナマラ氏の告白に加え、映画に説得力を与えているのが、当時の大統領との電話での生々しい会話だった。米国では、音声のやり取りも含め、残された記録が一定期間を経て公開される。

日本では重要な政策決定が検証不能のまま埋もれる。政治家の自伝は自慢話が多く、過去の過ちを語ることはほとんどない。政治家も公務員も税金を使って仕事をしているのに、秘密を墓場まで持つていくことが美德であるかのような。国立公文書館の資料の質や量は、米国の公文書館とは雲泥の差だ。働く人の数も米国の2500人に対して日本はたった42人である。

人も国も、しばしば過ちを犯す。だからこそ記録をきちんと残して、過去から学ぶことが大切になる。

〈山脇岳志〉